

令和六年度福祉作文コンクール

最優秀賞 「すべての人の幸せに向けて」

釜石市立釜石中学校

一年 菊池 きくち すず

小学校四年生の時だったはず。今も鮮明に覚えている。知的障害を持っている子を先輩がバカにした。嫌な感じでコソコソ笑ったりもしていた。「やめなよ！」の一言が言えたら力になれたかもしれない。でも当時の私には難しかったのだろう。

それから考えてみた。あの子が変な目を向けられる理由。「普通じゃない。」だれかが言う。原因はこれなんだろう。

普通じゃないとダメなの？皆と違ったら悪口言われるの？おかしいと思いつつも何も出来ず中学生になった。

初めに「普通」とは何か。私が思うに世間が言う普通とは皆と同じ行動。いわば「浮かない」という事だと思ふ。辞書には「どこにでもある。あたりまえ。」とあった。

今の世界では、浮かないように、嫌われないように意見を合わせてしまう学生。ドラマでよく見る出世のためにとおかしな事でも流してしまう大人の方も多いのではないだろうか。

思い返してみると私にもこんな事が結構ある。しかし、学校も会社も一人一人の個性を認め、受け入れ、尊重しなければならぬと思う。そして、団体としての結団力をみがいしていく素敵な場所だと思う。

そうなるためには、「普通なんてない。そして普通じゃなくなったら大丈夫。」という考えを頭の片隅にでも置くことが大切なのではないだろうか。

次に「福祉」について確認したい。そもそも福祉が何か分からない人も多いだろう。私も今回学んだ。福祉とは、「すべての人が幸せに生活するために何が出来るかを考えて実行すること」らしい。これ

を知って終わりにしてしまうと四年生の私のままだ。だから、もっと深く知り、自分に出来ることを探したいと思った。

私の母は障害を持つ子の先生をしている。力を借りて「就労継続支援B型事業所」へ見学させてもらいに行こう！と決めた。

ここは、福祉作業所で障害の方々働いている。小さな部品を組み合わせたり、シールを貼ったり、地道な作業が続いている。穏やかに真剣に取り組み、時々お話しをして笑顔を見ることができた。不幸になど見えなかった。

次に一日のスケジュールについて。朝八時三十分作業所に到着。九時からお仕事スタート。休けいをはさみながら、三時三十分まで働く。お昼には給食を食べるらしい。

障害があつて、きつと辛い事が多いと予想して緊張しながら行った私はびっくりした。ここにいる人は私たち中学生とそっくりなのだ！おしゃべりして、笑って、勉強して、休んで、また働いて。私はあたたかい気持ちになった。

私には家族にも兄弟にも障害者がいない。今は直接力になれないかもしれない。でも、いつか私は障害者の方々の役に立ちたい。精神科医になって。大げさな夢かもしれないけれど、悩みをかかえている人みんなを笑顔にしたい。

「福祉。」すべての人が幸せに生活できるように行動すること。この考えが世界中に広がるまで私は目標に向かって走り続ける。

令和六年度福祉作文コンクール

優秀賞 「みんなが幸せに」

釜石市立平田小学校

四年 佐々木 ささき 藍里 あいら

わたしはおばあちゃんが大好きです。おばあちゃんと話していると気持ちがほかほかしてきます。それは、どうしてなのだろうと思って考えてみました。

わたしが家を出る毎朝七時十五分になると、おばあちゃんは、「わすれものない。」

と聞いてくれます。いつも水とうをわすれそうになるわたしは、おばあちゃんに声をかけてもらおうと安心します。わすれものをしないで学校に行けるからです。

学校から帰ると、おばあちゃんはいつもわたしに、「おかえり。今日は学校でどんなことがあったの。」

とやさしく聞いてくれます。わたしはその日にあった出来事をおばあちゃんに話します。おばあちゃんは、楽しかったことや悲しかったこと、どんな話も最後まで聞いてくれます。土曜日や日曜日に、おばあのお手伝いで朝市に行った時も、がんばったことを話したら、

「よかったね。」

「楽しかったでしょう。」

とうれしそうに話してくれました。

おばあちゃんは、いつもわたしの目を見て、楽しそうに話を聞いてくれます。楽しかったのはわたしのほうで、おばあちゃんではないのに、にっこり笑顔でわたしを見つけてくれるのです。

「そうか。おばあちゃんのにっこり笑顔が、わたしの心のほかほかにつながっているんだな。」

わたしはやっと気がつきました。おばあちゃんは、いつも笑顔で、わたしのことを自分のことのようによろこんだり、考えたりしてくれています。これがわたしのほかほかの元になっていることが分かりました。

この前、総合的な学習の時間に、「福祉」について学習しました。辞書で調べてみたら、「人々が安心してくらせるかんきょう」と書いてありました。友達の辞書には、「多くの人々の幸せ。」と書いてありました。「多くの人々」の中には、わたしもおばあちゃんも、学級のみんなも入っているし、小さい子も、おばあちゃんのようなお年寄りも入っています。おばあちゃんは元気だけれど、体が不自由なお年寄りや、目が見えにくくなったり、耳が聞こえにくくなったりしたお年寄りもいることが分かりました。体が不自由になるのは、お年寄りだけではなく、小さい子や、わたしと同じくらいの年の子でも、なることがあるのだそうです。

わたしは、盛岡に行ったとき、車いすに乗って、元気に太鼓をたたくお兄さんといっしょに、さんさ踊りをおどったことがあります。太鼓をたたく音もリズムもみんなとそろっていて、すごくかっこいいと思いました。わたしも、お兄さんの太鼓に合わせて「さっくら」のかけ声を大きな声で出しました。幸せが来るようにと思いつながら元氣におどりました。体が不自由とか関係なく、みんな笑顔で、みんないっしょにおどりました。わたしはその時、「幸せだな。」と思いました。心がほかほかでいっぱいになったしゅん間です。

聞こえるとか聞こえないとか、見えるとか見えないとか、人によってちがいはあると思います。でも、どんな人も、いつも笑顔で幸せでいられるような世の中になったらいいなあと心から思っています。わたしもうちのおばあちゃんみたいに、自分以外の人の立場や気持ちも考えて、心をほかほかにできる人になりたいです。

令和六年度福祉作文コンクール

優秀賞 「ボランティア活動を通して」

岩手県立釜石商工高等学校

一年 坂下 芽生さかした めい

七月二十七日、私は友達と一緒に平田子供食堂に参加しました。活動の目的として、子供の孤食の防止や多世代交流、見守りがありました。この活動で体験したことと、三つの目的をまとめ、福祉について考えることにしました。

一つ目は、子供の孤食についてです。最近では、両親が共働きで、子供が一人で食事をするが増えています。子供だけで食事をすることを「子食で孤食」というそうです。また、「孤食」の原因が両親の共働きだけだと考えていましたが、子供達が塾や習い事をしていることで、家族で食事をするのが減っていることもありました。実際子供達と話をしていると、塾や習い事を掛け持ちしている子もいました。親も子も食事に対しての関心が減り、栄養バランスが偏るのも問題だと知りました。「孤食」をなくす解決策として、家族みんなが休みの日は、できるだけ、一緒に食事をする。帰宅時間が揃わないならば、朝食時間を合わせ、一緒に食事をする。ちよつとした心がけで、孤食はなくなると思います。また、「孤食」も含め、七つの「こ食」があります。少量しか食べない「小食」。家族一人一人が別々に違うものを食べる「個食」。子供だけで食事をする「子食」。決まったものや好きなものだけしか食べない「固食」。パンやパスタなど粉を使う高カロリーのを多く食べる「粉食」。加工食品や外食による塩分、糖分が多いものを食べる「濃食」。様々な「こ食」があります。この七つの「こ食」を改善させるためにも参加したボランティア活動の開催も多くすべきだと思います。

二つ目は、多世代交流についてです。子供についてもですが、高齢化社会になって今、高齢者の人達のこと考えながら生活しなければなりません。高齢者のことをよく知るには、交流の場を増やすことが大切だと思います。今回のようなボランティア活動に参加することは一番簡単な方法だと思います。ですが、普段から地域の方々に挨拶することや少しでも話をすることが一番大切なことだと考えます。普段から少しの時間でも交流していることで、ちよつとした変化や異変に気付くこともでき、気付いてもらうこともできます。また、ボランティア活動でも感じたように、お互い笑顔で交流することで、健康づくりにも繋がっていくと思います。

三つ目は、見守りについてです。子供の見守りについて考えると、保護者による登校指導や釜石市交通安全指導員の方々による登校の見守りが一番身近にあると思います。保護者による見守りについては、二つ目の多世代交流のように見守りながらも挨拶を通して子供達と親世代の交流ができます。また、交通安全指導員の方々の見守りも多世代交流に繋がると思います。課題だと思うことは、私が小学校低学年の時と比べると登校指導をされている保護者の人数や指導日数が減ってきていることです。共働き家庭が増え、指導の参加ができない保護者が増えていること、指導員の高齢化があると思います。対策を考えると私たち高校生がボランティアの一環として、登校指導の手伝いをするなど積極的に携わることが必要だと思います。

まとめとしては、今回のボランティア活動参加で子供の孤食の防止、多世代交流、見守りについて調べ、考えてみると、たくさん課題がみえてきました。その中でも、私たち高校生が取り組めることは限られていると感じました。しかし、高齢者や親世代、小学生以下の子供達とのくくりで考えると、丁度中間の世代である私たち高校生が何かすべきだとも思います。孤食の防止では、子供食堂のようなボランティア活動に参加すると共に参加の呼びかけや孤食防止の呼びかけも出来れば良いと思います。多世代交流では、地域活動に積極的に参加することや日頃の挨拶を徹底して行い、普段から地域の方々との交流を深めれば良いと思います。見守りについても日頃の挨拶を徹底すると同時に登下校の指導の手伝いをする事など、新しい提案もできれば良いと思います。このようなことを総合情報科で学んだことやこれから学ぶことを活かして計画実行することで、改善点が見え、すぐに実行に移せると思います。これからも今回考えたことを忘れず、進んで活動に参加していこうと思います。

令和六年度福祉作文コンクール

佳作 「すべての人に福祉を」

釜石市立栗林小学校

四年 藤原 ふじわら 柚夏 ゆずな

多くの人は、福祉のことを「高れい者福祉」や「しょうがい者福祉」など、一人では生活することができない人のためというイメージがあると思います。わたしも、さいしょはそう思っていました。でも、調べてみると、福祉の本当の意味は、「すべての人々が健康で幸せに過ごせるようにする。」ということだそうです。

しかし、初めに言った通り、福祉は、高れい者やしょうがい者というイメージがあり、多くの人にとって、身近に感じるものがあまりなく、自分のことになりにくいようです。でも、福祉はとくべつな人のためではなく、だれもが受けいられる幸せです。くわしく言うと、一人ひとりの命が守られ、衣食住の満足だけでなく、働くことなどを通して人や社会とのつながり、自分のそんざいいぎを感じられ、自己実現ができるようにするということだそうです。

わたしは、働くことが幸せにつながるなんて考えたことはありませんでした。たしかにだれかの役に立っている、必要とされていると感じることは、とてもうれしいです。それが働くことなどで感じる幸せにつながっているのだと、分かりました。

そして、幸せは一人ひとりちがいます。

例えば、たくさんの人に服をあげても全員が幸せになるとはかぎりません。これは、必要なものは、人によってちがうからだと思いました。服がほしい人もいれば食べ物ほしい人もいるなど、それぞれが今必要としているものはちがうので、その人に合った福祉が必要です。

わたしは、すべての人が自分の幸せを感じることができるようになっしてほしいと思いました。でも、今の社会福祉は、さまざまな問題を抱えていて、必要な人に必要なしえんができていないそうです。少子高れい化による、人手不足などが主な原因のようです。

このことをどうやったら解決していけるのか調べてみると、ロボットを使い、人手不足を解決するということが出てきました。わたしもテレビなどでロボットを見たことがあります。店で人の代わりに食べ物運んだり、注文をタブレットで受けたりなどをしている様子です。それは、とても便利だと思えます。そして、ロボットが人と同じように仕事をしていることがすごいと思いました。このように人の代わりに働くロボットがふえていけば、人手不足は少しずつでもかえんされていくと思いました。そして、このことが必要な人へのしえんにつながることをねがいます。

一方、わたしは、人々が幸せに過ごしていけるための平等な社会になっほしいと思います。そんな社会になるためには、一人ひとりの意しきが大切です。みんなが人にやさしくなれる社会になっほしいと思います。

わたしは、三年生の時に今の栗林小学校に転校してきました。初めは、知っている人がいなくて不安でしたが、クラスの子たちがやさしく声をかけてくれて、わからないこともたくさん教えてくれました。そして、不安だった気持ちが少しずつなくなっって、とても楽しくすごすことができました。このけいけんから、わたしも、困っている人には、やさしくしたいです。

高れい者やしょうがい者だけではなく、すべての人々が健康で幸せに過ごしていけることにつながっていくと思うので、広く広がっほしいと思います。

令和六年度福祉作文コンクール

佳作 「支え合う福祉の力」

岩手県立釜石商工高等学校

一年 みうら 三浦 はるか 遥華

私たちの生活の中には、たくさんの人々がいます。学校で一緒に勉強する友達や、近所のお年寄り、そして家族、みんながそれぞれの生活を送っていますが、その中には助けが必要な人もいます。そんな人たちを支えるためにあるのが福祉です。

福祉とは、みんなが平等に、そして安全に生活できるようにするためのものです。たとえば、年をとって一人で生活が難しくなったおじいさんやおばあさんが、安心して暮らせるように、福祉のサービスが提供されています。介護施設でのお世話や、ヘルパーさんが家に来てお手伝いすることもその一部です。

また、福祉は障害を持った人たちが社会の中で自分らしく生活できるようにするためのサポートも含まれています。学校にも、学校生活を楽しくめるように、特別な設備が整えられていたり、みんなで助け合う仕組みがあったりします。

また、私自身、福祉について考えるときに思うことがあります。それは、誰もが自分の力だけで生きていくのは難しいということだと思います。どんな元気な人でも、何かのきっかけで助けが必要になることがあります。だからこそ、助けが必要な人たちに手を差し伸べることが大切だと思います。私は、福祉は私たちみんなが関わるべきことだと思います。たとえば、近所にお年寄りが一人で住んでいる時には、時々顔を見せて「元気ですか？」と声をかけるだけでも、その人の安心感が増すと思います。また、学校で困っているとき、すぐに手を差し伸べることで、友達も安心して学校生活を送ることができます。このような小さい行動が福祉の一部だと考えています。

さらに、福祉には「共生」という考え方があります。共生とは、さまざまな違いを持つ人たちが一緒に助け合って暮らしていくことです。私たちの社会には、色々な人がいます。体が不自由な人、耳が聞こえない人、目が見えない人、そして特別なケアが必要な人もいます。たとえば、友達に発達障害を持つ子がいた場合、その子は、普通のクラスで授業を受けるのが難しいことがあります。特別支援学級で自分に合ったペースで学んだりすることができます。その友達と楽しい学校生活を送れるようにすることもまた、福祉の一環だと思います。

福祉は、単に助け合うだけでなく、全ての人が平等に生活できるようにするための大切な仕組みでもあります。今の日本では、高齢者や障害を持った人々、そして生活に困っている人々が安心して暮らせるように、国や地方自治体がさまざまなサポートをしています。介護サービスや福祉施設、そして経済的に困っている人たちへの援助など、多くの仕組みが整っています。しかし、福祉は制度やサービスだけではなく、私たち一人ひとりの行動や意識が大切だと思います。私たちが日常生活の中で困っている人を見かけたときに、何か手を貸すことができるようになれば、もっと素晴らしい社会になると思います。たとえば、バスや電車でお年寄りに席を譲る、重たい荷物を持っている人を手伝う、といった小さなことも大切なことです。

私は、福祉の重要性を学び、今後自分自身にできることを見つけていきたいと思いました。将来、もっと多くの人が助け合い、支え合う社会を作っていくためには、私たち一人ひとりが福祉について知り、考えて行動することが必要です。福祉の精神は、誰かのために何かをすることができるということです。

最後に、福祉の考え方を持つことは、みんながより良い社会を作るための第一歩です。困っている人を見かけたら、少しでも手助けをしようとする気持ちを持ち続けることで、私たちの社会はもっと温かく、優しい場所になります。そして、そのような社会で生きることが、私たちみんなにとって幸せにつながると思っています。

このように、福祉は私たちの生活にとっても大切です。みんなが安心して暮らせる社会を作るために、福祉の考え方を広めて、私たち一人ひとりができる小さな行動をしていくことが大切だといえると思います。そして、私たちが助け合い、支え合うことで、より良い未来を実現していくことが出来ます。福祉は、そのための鍵となる大切な考えだと思います。

「この席座りますか？」

バスの中で、私が言おうと思つて、言えなかつた言葉です。ある時、バスの中で座る席がなくて周りを見回していたおばあさんがいました。その様子を見ていた私は、席をゆずろうと思いましたが、「この席座りますか？」という言葉がどうしても言えませんでした。その時は、他の方が席をゆずっていました。

それだけではありません。探し物をしている人がいて、私はその場所を知っているので声をかけようとは思いますが、結局声をかけることができませんでした。このような場面にあうと、いつも後悔してしまいます。

私が声をかけられない理由は、声をかけて断わられると恥ずかしいという気持ちがあるからだと思います。でも声をかけている人たちは恥ずかしがらずに言えていて、すごく勇氣があるなと思います。

私の弟は、目の悪い人が重そうな荷物を持っているのを見かけて大変そうだなと思ひ、一度は通り過ぎましたが、気になったので戻り「荷物持ちましようか？」と声をかけたそうです。その方は「大丈夫だよ。ありがとう。」と言ひ、弟は「分かりました。氣をつけて下さい。」と言つて帰つてきました。弟のすごい所は、それを当たり前にできる所です。当たり前だと思つているから、断わられても恥ずかしいという考えが出てこないのだと思ひます。

私が声をかけられないのは、「やつてあげなくちゃ」という気持ちがあるからだと考えます。では、現時点で、声をかけるよりも簡単で、私にできることは何だろう。例えば、落ちているゴミをゴミ箱に捨てる、別のコーナーにある商品を元の場所に戻す、はがれたポスターをはり直す。日常にあるどんな些細なことでもいいから、氣がついて、行動する。それをコツコツ繰り返していけば、どんな時でも自然と行動できるような人になると思ひし、「やつてあげなくちゃ」ではなく、「こうしよう」という気持ちでためらわず動けるようになると思ひます。

次は、「断わられたら恥ずかしい」という考えをなおしたいのですが、その「恥ずかしい」という考えは、周りの目を氣にして行動しているからこそ出てくるものだと思います。なので、どうしたら周りを氣にせずに思ひ通りの行動がとれるようになるのか、調べてみました。

私が見たものは「他人軸ではなく自分軸で生きる」というものでした。「他人軸」とは、自分の中の何かを決めるときに物差しが他人の基準、他人目線でものを決定していることを言ひます。そんな他人軸で生きている人は、誰かから嫌われたくない、否定されたくないなどの気持ちが働くそうなので、私の「恥ずかしい」という考えも、他人軸で生きているからなのかもしれません。では、他人軸ではなく「自分軸」を確立していくためにはどうしたら良いのでしょうか。

一つ目は、自分が心地いい、やりたい事を選ぶこと。二つ目は、自分に「本当はどう思つている？」と問ひかけること。三つ目は、自分を労わり、褒めること。四つ目は、毎日、その日の良かったことを三つ以上あげて、向き合うことです。どれも「そんな事？」と思ひ内容かもしれないませんが、自分自身をもう一度確認することで、今まで考えもしなかつた事が分かつてくるかもしれないし、続けることで、少しずつ考え方が変わつてくるかもしれないし、そうして自分軸を太くしていくことで、自然と自分に意識が向くようになり、今よりももっと楽に人とコミュニケーションをとったり、「周りに人がいるから恥ずかしい。」という考えも出にくくなるんじゃないかなと考えました。

他人に声をかけるのは、ものすごく勇氣のある行動です。でも、それをみんなが自然とできるように協力し合えば、誰もが幸せに生きていけると、この作文を通して考へることができました。

令和六年度福祉作文コンクール

佳作 「福祉の作文」

岩手県立釜石商工高等学校

一年 石井 悠月いしい ゆづき

私は、高齢者や障害をもっている人も暮らしやすい社会にしていきたいと思っています。高齢者や障害をもっている人はとても大変だと思うので、自分でもできることを見つけて支えられるようになりたいです。

私は、いつも元気なおじいちゃんやおばあちゃんがいます。でも、一度倒れて病院に行ったこともあります。私はそれを見て大変だと思いました。今までは、元気に歩いていたのに病院から帰ってきたら、歩くのが、大変そうになっていました。入院すると筋肉がなくなるのだと思います。なので、家には、段差をなくしたり、手すりを付けた方が良いとお母さんが言っていて、確かに私も思いました。とても大変そうでした。私はできることは手伝ったり、バスなどでは高齢者に席をゆずったりするようにしました。これからも、しっかりまわりを見て、できることはやっていきたいです。町も段差などをなくしたり、みんなが暮らしやすいようになるといいと思います。困っている人を見て、知らないふりをする人が減って、助ける人が増えれば良い社会になって助け合いができると思います。私の地域には、たくさんのお年寄りの方がいます。今、日本では高齢化が進んでいます。町やバスでも、お年寄りの方を多く見かけます。朝、学校に行く時に乗るバスでもお年寄りの方がたくさんいます。私と友達はいすから立って席を譲るようにしています。バスは立って乗ると、ゆれるのでこけそうになります。私でも大変なので高齢者はもっと大変だと思います。前までの私なら、見ているだけの事が多かったと思います。でも今になって大変さを知ることができたので良かったです。バスに乗る時は、スマホばかりを見ているとお年寄りに気づかないで大変な思いをさせてしまうので、よく周りを見るようにしています。

高齢者のほかに障害をもっている人もとても大変だと思います。見てわかる障害をもっている人もいるし、見ただけではわからない障害をもっている人もいます。それぞれ悩みはちがうと思います。見てわからない障害をもつ人が、テレビ番組で言っていたことがあります、「見た目ではわからないから、理解してもらえない」

と言っていました。それを見て、そういう悩みもあるのかと知りました。それは、学校や職場、これからの社会で考えていかなければいけない一つの福祉の問題だと思っています。元氣そうだから大丈夫そうなど見た目で判断しないようにしたいです。見ただけでは、わからない障害があるというのをたくさんの方が、知るようになるの良い社会になっていくと思います。

そして、行動に移すことも大事だと思うけど、言葉も同じくらい大切だと思います。間違っ
て言ってしまったら、相手は傷ついて、一生忘れないと思います。自分が悪いと思っていなくても、相手にとって嫌な言葉かもしれません。相手が頑張ろうとしているのにバカにして、「できるわけない」とか

「無理だよ」と言うのは、やめた方が良いと思います。私も話す時は、相手が嫌な気持ちにならないか、考
えて話すように心がけています。私は嫌な言葉を言われたら覚えてるので、みんなも覚えて
いると思います。相手は、忘れないので気をつけていこうと思います。逆にうれしい言葉も忘
れないので、相手にとってうれしいことを言ってあげた方が良いと思います。

これから、高齢者、障害をもっている人など、誰もが住みやすい、良い社会にするために、一
人一人が周りを見て、自分ができることはないか、思いやりをもって、行動に移せるようにす
るのが大切だと思います。話すときには、考えて話せるようにしていきたいです。

私は今は高校生だけど、これから社会に出て、色々な人と会う機会が増えるので、色々なこ
とを学んで立派な人になりたいです。